

認知症予防「脳ぽち」の質的評価と 日常生活支援の必要度の変化と関係がみられた症例 意欲を指標として

正分ゆい 1), 藤野文崇 1), 山田寛之 2)

1) 株式会社ソフトアップJエントレリハ,

【はじめに】我々は認知症症状の予防, 改善を口的に脳機能トレーニングソフト脳ぽちを用いた機能訓練を実施している。このソフトは反応速度, 課題の正解率, 実施状況の質を評価することができる。今回、実施状況の質的評価と日常生活支援の必要度の変化に関係がみられた症例を経験したので報告する。

【症例紹介】症例は軽度認知症を有する80歳代の女性であり認知症に起因する軽度の記憶障害を有する症例であった。なお、症例と家人に文書および口頭で発表の趣旨を伝え同意を得た。そして、施設長に発表の承諾を得た事例紹介である。

【脳ぽちによる介入】脳ぽちを用いたトレーニングは機能訓練員とともに計算課題や記憶課題を週に1~2回実施した。この利用者に来る限り喜びを与え、モチベーションを高めるため無誤学習となるように意識し、正解時は誉めるように心がけながら介入した。

【経過】2016年2月頃は自己にて脳ぽちを実施することが困難かつ集中力が欠如した状態であった。家庭では、忘れ物が目立ち外出に対して消極的であり他者に迷惑をかけているのではとの悩みがあった。8月、10月にも集中力が欠如した状態となり、ADLの介助量が多く外出に対する欲求も低下した。そして、脳ぽちを集中して実施することも困難であった。その他の時期では状態が徐々に改善し機能訓練員と一緒にあれば集中して実施することが可能となった。この頃はADLでの介助量もやや軽減し外出への欲求は強くなっていた。

【考察】今回の結果から脳ぽちは脳機能トレーニングソフトとして有用なツールであるとともに質的評価が中等度の認知症を有する利用者のADL能力を反映する可能性が示唆された。今後、質的評価とADL状況の関係について多くの利用者を対象として調査を実施していきたい。